燕市立吉田小学校
漆原　史剛（平成 23 年度　総の会）

社会参画の意識を高める社会科入門期の学習指導の在り方

～小学校３年社会科販売・生産の単元における教材と単元構成の工夫を通して～

１　主題設定の理由

2024 年 12 月に、学習指導要領改訂に向けて、教育課程の基準等の在り方が中央教育審議会に諮問された。顕在化している課題として「子供の社会参画の意識（中略）についても、一部改善傾向が見られるものの国際的に見て低い状況が続いて」いることが挙げられている。また、2026 年８月の社会・地理歴史・公民ワーキンググループ取りまとめにおいても、「社会参画意識に関する課題」として「社会との関わりを実感できる学習活動が不十分ではないかといった指摘がある」とされている。

社会科の授業で社会参画の意識を高めていくために、特に小学校社会科入門期では、社会とかかわる上で基盤となる「地域社会に対する誇りと愛情」を育むことが重要であると考える。山田（2020）はシビックプライド（自分自身が関わって地域を良くしていこうとする、当事者意識に基づく自負心）が、「社会科教育が育成を目指している社会参画の意識（中略）と重なる部分が多い」と述べ、「自分たちが住んでいる地域に対して誇りと愛情を養うことは、（中略）シビックプライドへつながる」と示唆している。この「地域社会に対する誇りと愛情」を育むには、小学校社会科において、身近な地域における社会的事象を自分とのかかわりの中で捉える学習経験を積み重ねることが必要である。この経験を積み重ねることにより、地域社会とのかかわりを一層広げたり、深めたりすることができるものと考える。

しかし、これまでの実践では、身近な地域における社会的事象と自分とのかかわりを見出せないまま追求が進んだ結果、地域社会に対する誇りと愛情を十分に育めなかった。そこで、本研究では、次の仮説を立て、社会科入門期の子どもたちに対する学習指導の在り方を主題とすることとした。

２　研究仮説

社会科入門期の小学校３年社会科において、地域のよさを強く実感できる教材を選択し、教材との深いかかわりを生み出す単元構成の工夫を行うことで、身近な地域における社会的事象を自分とのかかわりの中で捉え、地域社会に対する誇りと愛情をもつことができるだろう。

３　研究内容と研究方法

(1) 研究内容

① 地域のよさを強く実感できる教材の選択

地域社会に対する誇りと愛情を育むためには、教材となる地域の商店や工場がもつ魅力を強く感じることが何よりも重要である。本研究では、地域のよさを強く実感できる教材を、「子どもの生活圏内にあり、働く人々の思いや願いが込められている事象」とする。可能な限り子どもたちに身近であり、携わる人の思いや願いに触れられる吉田地域の教材を取り上げ、子どもたちが教材とのかかわりを通して、そのよさを感じられるようにする。

② 教材との深いかかわりを生み出す単元構成の工夫

身近な地域における社会的事象を自分とのかかわりの中で捉えるためは、単元の中で教材とのかかわりを深め、社会的事象を捉え直していくことが重要である。そのために、本研究では、教材と繰り返しかかわる場を単元の中に位置付ける工夫を行うことにより、教材との深いかかわりを生み出していくようにする。

(2) 研究方法と検証

第一単元　「地域で野菜を売る人々　～マルイとまがり屋の工夫～」

第二単元　「地域で豆腐を作る人々　～嘉平豆腐店のこだわり～」

これらの実践において、以下の２点から仮説の有効性を検証する。

①　授業での児童の様子

子どもたちが吉田地域の教材のよさを感じたり、地域の社会的事象を自分とのかかわりの中で捉えたりしているかについて、抽出児 A 及び抽出児 B の様子から検証する。（授業記録及

びノート、ワークシートの記録、アンケートの記録）

② アンケートによる比較

7段階評定法を用いて地域に対する誇りや愛情がどの程度育まれているかを数値化する。実践1の前後、本実践2の後の3回の記録を比較し、手立ての有効性を検証する。併せてアンケートの自由記述から、地域の社会的事象を自分とのかかわりの中で捉えているか、地域社会に対する誇りと愛情をもつことができているかを検証する。

3 研究の実際

(1) 第一単元「地域で野菜を売る人々 ～マルイとまがり屋の工夫～」

①扱う教材とその意図

マルイ　新潟県に本部を置く地域のスーパーマーケット。野菜などを全国各地から仕入れている。品揃えの多さなどにより、お客さんの多様なニーズに応えようとしている。

まがり屋　学区の野菜直売所。近隣の農家から野菜を仕入れ、生産者の氏名が分かるように販売している。商品の新鮮さにより、お客さんのこだわりやニーズに応えようとしている。

②単元の様子

導入では、家族がどこで野菜を買うのか、調査した紙をもとに表やグラフを作る活動を行った。すると、子どもたちは「スーパーマーケットに野菜を買いに行く家庭が多いこと」、「野菜直売所でも野菜を買う家庭があること」に着目した。家庭で追加の調査活動を踏まえ、スーパーマーケットや野菜直売所で野菜を買う理由を予想し、学校近くにあるスーパーマーケット「マルイ吉田店」と野菜直売所「まがり屋」の野菜の売り方を調べる計画を立てた。

はじめに、マルイ吉田店の野菜コーナーの見学を行い、子どもたちは売られている野菜の種類の多さに関心をもった。そこで、追加のマルイ調査活動を行った。トマトが10種類以上ある、なすが2か所置いてあるという事実や店長の話をもとにマルイの野菜を売り方について話し合った。その結果、マルイでは、野菜の品揃えを多くしたり置く場所を工夫したりしてお客さんが野菜を買いやすいようにしていることに気付いた。

その後、まがり屋の見学を行い、子どもたちは燕市の野菜が多いことに関心をもった。そこで追加のまがり屋調査活動に取り組み、その結果や店員さんの話をもとにまがり屋で燕市の野菜が多いことについて話し合った。そこで、自分たちなりの予想を確かめるため、店員さんに直接話を聞き、「燕市の野菜が多いのは、地元の新鮮なおいしい野菜を食べてほしいから」というまがり屋の願いを知ることができた。

A児は、値段に着目して見学や追加調査活動を行い、お店の工夫を紹介する新聞には、野菜を置く場所を工夫していることを記述した。B児は、新鮮さに着目して見学や追加調査活動を行い、熱心に働く人に質問しながら学び進めた。

③考察

表1　アンケートの結果

	第一単元の前	第一単元の後
吉田はよいところだと思いますか。（誇りに関わる質問）	平均6.53 A児　5　わからない。 B児　4　わからない。	平均6.29 上昇2人維持20人下降6人 A児　5　理由は、わかりません。 B児　4　理由は、わかりません。
吉田のことは好きですか。（愛情に関わる質問）	平均6.53 A児　3　わからない。 B児　7　楽しいことがいっぱいあるから。	平均6.32 上昇3人維持17人下降8人 A児　5　吉田を前からみていても同じ B児　4　お店の勉強をしただけでは気持ちはかわらない。

〔7：すごく思う・すごく好き　4：どちらでもない　1：全く思わない・全く好きではない〕

第一単元は、身近な地域にある店において販売に携わる人の姿を具体的に学ぶことはできたが、地域のよさを感じたり、地域に愛情をもったりすることはできなかった。（A児・B児のアンケート記述「わからない」「お店の勉強をしただけでは気持ちはかわらない」等の記述から）

この要因は、2つの教材の比較する単元構成とすることで大手流通店と地元密着店それぞれの

よさをつかむことをねらったが、いずれの追求についても、人の思いにじっくりと触れる機会が少なく、その店が地域にあるよさを強く実感するまでには至らなかったためである。また、自分（や家族）の日々の買い物と各店の販売の特色とのつながりを考える学習展開を取り入れられず、自分とのかかわりの中で考察する姿を生み出せなかったためでもある。

ただし、クラス全体での調べ学習に加えて、追加調査を行うなど、疑問に対する追求活動を繰り返したことで、調べる活動自体に楽しさを感じたり、調べたことを仲間と共有することに意欲な様子があったりし、身近な地域の教材は、子どもの追求の原動力となることが改めて感じられた。

(2) 第二単元「地域で豆腐を作る人々 ～嘉平豆腐店のこだわり～」

①扱う教材とその意図

嘉平豆腐店　吉田上町にある豆腐工場。天然にがりを使用した手作業で作る豆腐がある。店主の斎藤さんは、おいしい豆腐を作ってお客さんに食べてもらうことを第一の信条としている職人さんであり、製品や原材料にこだわっている。

②単元の様子

導入で、子どもたちは、学区にある嘉平豆腐店で作られた豆腐とスーパーマーケットのPB商品を食べ比べることで味や食感の違いを感じ、嘉平豆腐店ではおいしい豆腐がどのように作られているのか明らかにしたいと考えた。そこで、工場の見学により豆腐の作り方を調べる計画を立てた。見学では、手作業のにがりまぜを体験させてもらうなど、工場内の機械や工程を丁寧に解説してもらった。また、その後、見学でさらに疑問に思ったことを明らかにしていくために、子どもとともに学習計画の修正を行った。まず、嘉平豆腐店で作られた豆腐が地域でどのように食べられているのかを明らかにしたいと考えたので、追加の調査活動として、家庭において嘉平豆腐店の豆腐を購入したことがあるかを調べた。その結果をもとに、マルイを始め周辺のスーパーに並んでいること、また、給食で毎日のように嘉平豆腐店の製品が提供されていることを確認したことにより、嘉平豆腐店が自分たちの生活を支えていることを見出した。

その後、見学後に明らかにしたいとした疑問「朝3時に起きて4時から仕事をしている理由は何か」について考えていくこととした。斎藤さんが朝3時に起きることと、おいしい豆腐を作っていることとの関係について話し合い、自分たちなりの予想を確かめるために資料で解決を図った。朝に天然にがりをまぜていること、天然にがりを使った豆腐は機械で作ることができないこと、大変な思いをしてまで天然にがりを使っているのは、おいしい豆腐を作り人々に届けたいという斎藤さんの願いがあることに気付いた。

A児は単元当初に関心をもった作業工程をナンバリングしながら整理し、斎藤さんの豆腐づくりについて「さいとうさんは、天然にがりがないとおいしいとうふができないと考えるから使っている」と価値付けた。B児はノート記述をもとにしながら「手さぎょうのほうが心をこめて作ってもっとも一っとおいしくなると思う」と自分の考えをポスターに記述した。

③考察

表2　アンケートの結果

	第一単元の前	第一単元の後	第二単元の後
吉田はよいところだと思いますか。(誇りに関わる質問)	平均6.53 A児　5　わからない。 B児　4　わからない。	平均6.29 上昇2人維持20人下降6人 A児　5　理由は、わかりません。 B児　4　理由は、わかりません。	平均6.55 上昇7人維持19人下降2人 A児　5　わからない。 B児　7　社会の勉強をしてきて、いいところだと思ったから。
吉田のことは好きですか。（愛情に関わる質問）	平均6.53 A児　3　わからない。 B児　7　楽しいことがいっぱいあるから。	平均6.32 上昇3人維持17人下降8人 A児　5　吉田を前からみていても同じ B児　4　お店の勉強をしただけでは気持ちはかわらない。	平均6.37 上昇6人維持17人下降5人 A児　4　いい町だと思ったから。 B児　7　やさしい人がいっぱいいるから。

どちらの質問においても、第二単元を実践した後の方が数値がわずかに上昇している。第二単元後においては、上昇した子どもの数が上回った。誇りに関する質問においては、本実践以前の数値を上回ることとなった。A児は吉田のことが好きかどうかについて「どちらとも言えな

い」としながらも「いい町だと思ったから」と記述した。また、B 児は初めていずれのアンケートも「すごく思う・すごく好き」を選び、「社会の勉強をしてきて(吉田を)いいところだと思ったから」「やさしい人がいっぱいいるから」と記述した。

この理由として、教材を 1 つに絞り、人の思いにじっくりと触れる機会が増えるように追加の調査活動や話し合い活動を組織したことにより、斎藤さんの豆腐づくりに関わる工夫や努力を捉えることができたからではないかと考える。給食で毎日のようにお世話になり、近隣のどのスーパーでも売られている嘉平豆腐店の製品は、社会的事象と自分とのかかわりを見出すために有効だった。また、話し合い活動を繰り返すことで教材と深く関わり、朝 3 時に起きることや天然にがりを使用していることなど、具体的な社会的事象を通して学び進められた。

B 児がアンケートで「やさしい人がいっぱいいる」と回答したことについて後日尋ねると、その中には友達や先生に加え、嘉平豆腐店の斎藤さんが含まれていた。また、A 児は、イラストを交えながら、斎藤さんの願いを「嘉平豆腐店がもうちょっといいお店にしたい」と記述した。A 児と B 児が、嘉平豆腐店の斎藤さんについての社会的事象を通して、地域の人のために工夫や努力をしていると実感できたことが要因と考える。しかし、地域社会に対する誇りと愛情を育むことに関しては十分ではなかった。例えば、予想を裏切られるような社会的事象に出会える調査活動や話し合い活動により、社会的事象を捉え直す単元構成が必要だったのではないかと考える。「おいしい豆腐を作ろうとしてきたのに、なんで…」と学習してきたことを覆されるような社会的事象に出合わせることができれば、「やっぱり斎藤さんは、…」と自分の言葉で捉え直す姿が見られたかもしれない。

４　研究の成果と課題

(1)　成果

本研究では、A 児及び B 児を中心とした学級集団の姿から、社会科入門期の小学校３年社会科において、地域のよさを強く実感できる教材を 1 つだけ選択し、教材との深いかかわりを生み出すために働く人の具体的な姿を見せ、一人一人をより支援したことで、身近な地域における社会的事象を自分とのかかわりの中で捉え始め、地域社会に対する誇りと愛情をもち始めた子どもの姿が見られた。また、子どもたちが、商店や製品を身近に感じて、日常的に親しむようになった。「昨日も嘉平さんに連れて行ってもらって、豆腐を買ってきたよ」「今日のお汁にも、嘉平さんの豆腐が入っているね」等の会話が広がっていることも、誇りや愛情をもち始めている姿ではないかと捉えている。

(2)　課題

予想を裏切るような社会的事象に出会える単元構成とすることで、身近な地域における社会的事象を自分とのかかわりの中で捉える子どもを育てる実践に取り組んでいきたい。また、社会科入門期にもかかわらず、話し合い活動に不安感をもつ子どもたちに対する支援が不十分であった。特に、社会的事象に対する解釈を話し合う場面では、一部の子どもに発言が偏った。自分の考えがもてなかったり自信がなかったりした子どもにとっては、地域社会に対する誇りと愛情を育むには困難な状況だった。まずは自分の考えがもてるよう補助資料等で支援する、安心できる小グループ単位の話し合いから始めるなど、本当の意味で一人一人が社会的事象を自分とのかかわりの中で捉える実践を目指したい。

参考引用文献

・中央教育審議会(2024)「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について（諮問)」
・中央教育審議会(2026)「社会・地理歴史・公民ワーキンググループ取りまとめ（案)」
・山田均（2020)「シビックプライドを醸成することの可能性について」『奈良学園大学紀要』第 12 集